

大仁田 雅彦 著
Masahiko Onita

平成30年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
「実演舞台芸術の国際共同制作を通じたアートマネジメント人材育成」

昭和音楽大学

オペラ舞台用語集
Terms of Opera Theatre
使用場面別 英語表現付

まえがき

舞台上で用いられる特殊なことばについての辞書的な書籍は、これまでもいろいろ出版されてきました。また、いまではインターネットで検索すれば、たいていのことばについては調べることができます。

そこで、今回この用語集を作成するにあたっては、「オペラ」に特化してまとめるように心がけました。オペラの舞台関係の仕事を志す学生の方や、オペラ制作に携わってまだ数年で、どうも舞台用語がなじめないというように思っておられる方のために、制作の手順からオペラに関わっているスタッフ、そして舞台用語の数々を美術、音楽などの視点から書いてあります。

みなさんのお役にたてることを心から願っております。

昭和音楽大学 教授

大仁田 雅彦

本学では、平成 28 年度から 30 年度まで 3 年間にわたり、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受けて、大学オペラ公演の制作現場を活用した人材育成講座として、《実演舞台芸術の国際共同制作を通じたアートマネジメント人材育成》を実施しました。

全国の劇場、音楽堂等、地方公共団体等の職員、芸術団体の方々など（総勢のべ 185 名）に、総合芸術であるオペラ公演の制作の、各種稽古から本番に至るまでの一連のプロセスを、講座や現場研修などを通して身近に学んでいただきました。複雑で大規模なオペラ制作を総合的に学ぶことで、オペラ制作はもちろんコンサートなど他の舞台実演芸術制作への実力と自信をつけてもらうことが目的です。

この用語集は本事業の 3 年間の集大成として、国際性をもったアートマネジメント人材の育成に資するために刊行するものです。

オペラの舞台用語集

使用場面別
英語表現付

Terms of Opera Theatre

第1章 事前の準備段階	2
Chapter 1 Preparation phase/pre-production process	
第2章 劇場スケジュールにかかわることば	6
Chapter 2 Terms for production schedule on stage	
第3章 創作にかかわるスタッフ	13
Chapter 3 Creative team and technical staff	
第4章 美術にかかわることば	16
Chapter 4 Terms for scenery	
第5章 舞台機構と舞台備品	18
Chapter 5 Stage machinery and equipment	
第6章 音楽にかかわることば	29
Chapter 6 Terms for music	
第7章 その他の舞台用語	32
Chapter 7 Other theatrical terms	
図解 1～10	37～44
日本語索引	45
英語索引	47

第1章 事前の準備段階

Preparation phase/pre-production process

プレゼンテーションと打ち合わせ

Overview of production presentation and production meeting

プレゼンテーションは演出家の想定した作品解釈と、それにもとづく装置・衣裳・照明等のプラン説明。模型やデザイン画を使って行われる。遅くとも公演初日の1年前には行う。

その後発注のための打ち合わせ、進行の打ち合わせなど多くの打ち合わせを重ねるが、事前打ち合わせの中で最も重要なのは劇場との打ち合わせ（公演内容、規模、上演時間の確認、スタッフの構成、搬出入の車輛計画、スケジュール確認）である。

資料の作成 - 1 -

Reference 1

こうばん
香盤

Scene division marked by entrance and exit of casts

「香盤」とは、出演者の出番を場面ごとに表にしたもの。出演者の出番と人数が一目瞭然に把握できる。合唱が多数出演するオペラなどの場合さすがに例外はあるが、可能な限り（継ぎ足してでも）1枚の紙に収めるのが原則である。

資料の作成 - 2 -

Reference 2

舞台平面図・断面図

Ground plan and side elevation of set

平面図 舞台を上から見た状態を図面化したもの。(P.37-39 図解 1,2,3)

断面図 舞台を横から見た状態を図面化したもの。(P40-42 図解 4,5,6)

平面図、断面図は劇場での見切れ（P.16 参照）の事前検証のために欠かすことのできない図面である。

縮尺は1/100が多いが、1/50、1/200など検証内容によって他の縮尺を用いることもある。

資料の作成 - 3 -

Reference 3

つけちょう
附帳

List of props, handprops, shoes

プロダクションに必要な小道具、履物、あるいは出演者ごとに身につけるものなどをまとめたリスト。それぞれ「小道具附帳」「履物附帳」「俳優附帳」などと呼ぶ。総合的な附帳には個々のアイテムの発注先を明確に記入する欄を作り、それを元に発注先ごとの「発注附帳」も作成する。（すべてを1社に発注する場合にはあえて別々に作る必要はない）

リハーサル - 1 -

Rehearsal 1

音楽稽古

Musical rehearsal

音楽スタッフの主導による稽古。譜読みにはじまり、個人稽古、アンサンブル稽古のように積み上げていく。演劇における読み合わせに相当する作業ともいえるが、実際にセリフを伴うオペラ（例：《魔笛》《フィデリオ》など）では、演劇同様読み合わせを行う場合がある。

リハーサル - 2 -

Rehearsal 2

立ち稽古

Rehearsal

演出家による、出演者に動きをつけたり、立ち位置を決めたりしていく稽古。歌手が暗譜を済ませているのが前提となる。これもソリストの場面と合唱の出

演場面、助演の出演場面を別々に進め、徐々に合わせていく。

リハーサル - 3 -

Rehearsal 3

稽古場の準備

Preparation in rehearsal room

平面図をもとに、稽古場用の平面図を作る。稽古場では実際の舞台と同じサイズが取れることは少ないので、演出上最低限必要な部分を演出家に確認しつつ稽古用の装置を準備する。作品の性格に適した物を準備するだけでなく、限りなく経済的に低コストでできるように工夫することが特に重要である。

稽古期間が例えば1ヶ月あったとして、通しで同じ場所が使える場合と、毎日稽古場を渡り歩く（ジプシーという）場合では、稽古のやり方が全く異なる。

リハーサル - 4 -

Rehearsal 4

稽古場の使い方

Planning layout of rehearsal room

まずどのような向きで使用するかを決める。多少なりとも長方形の部屋である場合、長手方向を間口、短いほうを奥行きとして使うのが一般的であるが、演出内容によって奥行きが重視される場合には逆にすることもある。また、鏡の有無、固定のレスンバーがある場合、また稽古場の掛け時計の位置なども判断の基準となる。稽古場の出入口との関係についても配慮する。

リハーサル - 5 -

Rehearsal 5

稽古場の鏡

Fixed mirror in rehearsal room

稽古場の設備として壁面全体に鏡があるところが多いが、これにはカーテンが付いていて隠すこともできるようになっている。稽古内容によって鏡を活かす場合とそうでない場合があるため、稽古中にこのカーテンを開閉することも

ある。

リハーサル - 6 -

Rehearsal 6

稽古道具と衣裳

Rehearsal set and costume

舞台で使用する衣裳や小道具、履物は、稽古の段階から本番と同じものを使用するのが理想であるが、あまり初期段階からすべて完璧にすると、出演者に負担となる場合もあり、稽古用の衣裳、小道具で代用するほうがよい時もある。また、新作では衣裳や小道具の製作と稽古の進行が並行して行われることが多く、稽古を進めながら衣裳や小道具の重さ、使いやすさなどを直接出演者と相談しながら、製作者に素材や重さ、大きさなど改善を求める。

衣裳合わせ

Costume fitting

「衣裳合わせ」とは言葉の上では出演者のために用意した衣裳をフィッティングする作業であるが、実際には衣裳まわりのすべて（かつら・履物・装飾品等）を演技や歌唱に支障のないようにしていく作業。必ず写真も撮影する。正面全身、背面全身、側面全身の3ショットを基本として、バストアップ、かつらまわりが重要な場合は頭の前、横、バックを別に撮影することもある。

デジタルカメラによる撮影の場合、原則的にフラッシュは使用せず、全身写真ではカメラは被写体の身長のおよそ半分の高さくらいに低く、レンズを水平に構えるのが望ましい。

特殊メイクを伴う場合には、別途メイクテストも設定し立ち合うことが必要である。

第2章 劇場スケジュールにかかわることば

Terms for production schedule on stage

搬入

Load in

外部から劇場内へ、大道具、照明機材、音響機材、小道具、衣裳などを運びこむこと。搬入する場所を搬入口といい、よく考えて設計された搬入口とそうでないものでは、作業効率が全く異なる。エレベーターや階段でないと搬入できない劇場もあり、事前にそのサイズを実測しておいて、搬入できない大きさのものを持ち込まないように心がける。また、劇場の立地条件によっては深夜、早朝の搬入が制限、もしくは禁止されている場合もあるので注意が必要である。

仕込み

Fit up

搬入されたものを仕込み図面に沿って建てたり吊ったりする作業を総称して「仕込み」というが、必ずしも外部から搬入したものだけでなく、劇場内部に備品、機構として存在するものと組み合わせでの作業となる。全体の物量を配慮し、事前に仕込みにかかる時間と、それに関わる必要な人員を割り出し、仕込みに間に合うよう余裕をもって発注、手配しておくことが肝要である。

タツパ決め

Deading session

舞台の開口部の大きさ（P.19 参照）は事前に図面で仮に決定しておくが、実際に仕込みを終えた段階では、図面では判断できなかった問題が生ずることがある。実際にはまず図面通りにポータルや一文字幕の高さを合わせたのち、見た目や照明、音響、映像などの問題がないことを確認して次の段階に移る。すべての吊り物を飾り位置に飾ってみて、上部が見切れていないか、また、すべての吊り物を飛ばした状態で飛び切っているか（吊り物の下部が客席から見切

れていないか) もあわせて確認する。

フォーカス (サス合わせ) とバミリ

Focus and marking

原則としてはすべての装置を場面転換しながら、舞台装置や出演者の立ち位置に適切に照明があたるかどうかを検討しながら照明機材の角度と光の範囲を決める作業。場合によっては転換しなくともフォーカスできるものもあるので、諸々の位置を照明スタッフに伝え、かつ舞台床にマーキング (「バミリ」という) をしていく。一旦、別の場面に転換したあとでも、確実に同じ場所に装置をもどせるかどうか、すべてのバミリをもれなく終えたことも確認しておく。吊り物の飾り高さも手動バトンの場合は綱元のロープにバミる。電動ボタンでは操作卓で記憶できる場合は数値を記憶させるが、できない場合はタップロープとって、バトンの端末にロープを縛り付け、それにバミリをつけておく。

譜面台と譜面灯

Music stand and its light

明かり合わせにそなえて、オーケストラピットに譜面台と譜面灯をセッティングする。これは、最終的にオーケストラが入った時と完全に同じ状態をめざすものではないが、ある程度近い状態にしておいて、照明づくりに譜面灯の明るさがどれくらい影響を及ぼすか、を判断するために不可欠であり、また、暗い舞台上で、かなり低くなっているオーケストラピットの存在を舞台上の人々に認識させるためにも必要である。

明かり合わせ

Lighting session

フォーカスののちに行う、シーンごとの明るさ (暗さ) と変化の秒数を定める作業。照明の Cue の数にもよるが、舞台稽古との兼ね合いによって、もっともシビアな時間の取り合いになる。フォーカスと異なり必ず場面転換を伴うので、舞台稽古で最初に行う場面の明かり合わせを直前までやり、舞台稽古の終

終わったあと最後のシーンの明かり合わせを行うなど、さまざまな調整を必要とする。表記する場合は「照明合わせ」と書くことが多い。

音響チェック

Sound check

19世紀までに作曲されたオペラでは電気音響をほとんど用いないので、長時間のチェックは必要としないが、SE（効果音）再生やテクニカルリハーサルでの音源使用を考えると、まったくしなくてよい、というわけにはいかない。時間帯として、上記照明作業の合間、照明スタッフの食事休憩の間に、音響スタッフだけで行うことが多いが、舞台の状態がチェックのために望ましい状態になっていないとできない場合は、休憩前に場面を転換することもあり得る。

テクニカルリハーサル

Technical rehearsal

舞台の技術的進行で、困難であることが事前にわかっている場合には、出演者を舞台に迎える前に必ずテクニカルリハーサルを行う。困難の度合いにより、まず作業灯で、次に照明付きで、さらに場面転換の際に音楽を伴う場合には録音による音楽付きで、と入念に行い、関係者に公演上の技術的な進行や注意点を共有させつつ、安全確実な動作ができるまで繰り返す。

舞台監督は音響スタッフに対し、テクニカルリハーサルに必要な音源をヴォーカルスコアの上での始点と終点をあらかじめ指示しておき、時間の無駄が生じないようにも配慮する必要がある。必要な場合には出演者つきのテクニカルリハーサルも行う。

場当たりと舞台稽古（ピアノによる）

Walk through and stage rehearsal with piano

舞台上での立ち稽古はまずピアノ伴奏で行うのが普通である。中でも、出演者が必要なレベルのテクニカルリハーサルは最優先で、他にも事前に立ち位置や出入りの場所など、稽古場と異なる状況が多数ある場合には、いきなり稽古を場面の最初からはじめてしまうよりも、場当たりと呼ばれる確認作業を事前に済ませたほうが、結果的に時間を節約できる。

サウンドチェック

Sound balance check with orchestra and singer

前述の音響チェックと異なり、舞台袖での演奏（カゲ歌、カゲコーラス、カゲバンダなど）がある場合、また音楽の演奏中に効果音が求められるオペラなどでは、オーケストラによる舞台稽古の中で、サウンドチェックを行うことが多い。通し稽古の前に、音楽的に問題が起きそうな箇所を事前にチェックしておくほうが、立ち稽古における場当たりと同様、短い稽古時間を結果的に有効に使用できる。オペラ公演は原則として生音のみで行われるが、必要に応じてマイクロフォンで拾い弱く拡声する（舞台装置が箱状で、カゲ歌が完全に遮蔽されてしまう場合など）ことや、録音されたバンダを再生することもある。その場合でも、生音との調和、バランスを最優先してチェックする。音の方向や音量は指揮者が最終判断する場合がほとんどであるが、演出家、音楽監督などの意向を反映させることもある。

舞台稽古（オーケストラによる）

Stage rehearsal with orchestra

指揮者が主導する稽古であるが、舞台上の装置や照明などは本番通り転換する。衣裳、ヘアメイクに関しては、最終のオーケストラ舞台稽古、それに続くゲネプロでは身につけるのが原則である。

ゲネプロ

Final dress rehearsal

G.P.（ドイツ語のゲネラルプローベを略して通称「ゲネプロ」と呼ぶ。イタリア語ではPROVA GENERALE プローヴァ・ジェネラーレ）は、すべてを本番と同じように進行させる稽古。本来、この日を初日のつもりとして諸々を逆算してスケジュールを決めていく。指揮者・オーケストラの着衣以外は、本番同様に進行されるべきである。プロダクションによっては、関係者やスポンサーに公開するケースもある。可能な限り満席状態のほうが、本番と同じ音響条件になるので望ましい。

開演前チェックとプリセット

Pre-show check and preset

本番に先立って、舞台、照明、音響、映像などの各セクションは、すべての機器が正確に作動するかなどについてチェックを行わなければならない。特に公演日の朝に地震などが発生した場合には入念なチェックが必要である。すべてのチェックを終えたら、劇場を開場できる状態にする。これを「プリセット」という。

開場

Opening house

客席開場はプロダクションによるが通常開演 60 分前、45 分前、30 分前のいずれかに設定されることが多い。舞台の準備が整わないなどのやむをえない事情により、設定した開場時刻にお客様を場内にご案内できない場合には「ロビー開場」とする場合もあるが、その場合客席係が適切な対応をしないと、却って混乱を招くこともあるので慎重に判断しなければならない。

開演前のセレモニー

Sequences before performance

これもプロダクションによってさまざまであるが、一般的なオペラを例にとると開演5分前に1ベルと呼ばれるベル（チャイムや、それぞれの劇場で製作した音、もしくは公演にふさわしいテーマなど）を鳴らし、鳴り終わってすぐ場内アナウンス（禁止行為など）、その後ややあってオーケストラのチューニング、その後客電ハーフ（場内の明かりを30%から50%程度に落とす。非常口誘導灯もこのタイミングで消灯することが多い）、定刻に客電アウト（場内暗転）、続いて指揮者登場というパターンが多い。しかし決まりがあるわけではないので、客電が明るいまま指揮者が登場し、音とともに客電を消す、など演出家、プロデューサーなどの意図によって多くのやり方がある。チューニングは海外ではオーケストラが勝手に行う劇場もあるが、日本では舞台監督のキューで行われるのが常識である。

休憩

Interval / Intermission

観客の生理的な欲求の解消のために、ある程度の長さをもつ公演に休憩は不可欠であるが、既成の作品、例えばヴァーグナーの楽劇《ラインの黄金》のように2時間半以上もの音楽が連続して書かれた作品には休憩を挟むことはできない。また《ラ・ボエーム》のように4幕からなる作品を休憩なしで上演したケースや、《椿姫》3幕を休憩なしで上演した例など、演出上の意図からあえて休憩を挟まないでドラマの一貫性を強調することも現在ではしばしば行われている。演出意図が明確で、プロデューサーがそれに賛同した場合には、こうした例が見られるものの、実上演時間（休憩を含まない）が3時間を越える演目では、せめて1回は休憩をとらないと、困った状況に陥ることは想像に難くない。（こうした場合には、制作者は開演前に観客に休憩がないことを周知させる義務がある）また舞台装置の規模が大きく、休憩時の場面転換に非常に時間を要する場合などは、観客のためというよりもスタッフのために休憩時間を長めに設定せざるを得ないこともある。

終演後の作業

Work after performance

舞台が終演した後、特に公演にトラブルがなかった場合でも、出演者が使用した小道具、着用した衣裳、履物、かつらなどは放置したままにすると次回の公演に支障をきたすので、数量確認、洗濯、乾燥、メンテナンスなどを行ってからスタッフは帰宅する。また、緞帳を使用する演出で公演の最後に緞帳が下りた状態だとしても、観客が完全にハケたことを確認した上で緞帳は上げて帰るのが普通である。

バラシ

Strike

公演がすべて終了したら、舞台は原状復帰するのが原則である。従って、仕込み以前の状態に戻す作業となるが、プロダクションを保管して再演に備えるか、今回きりのものとして廃棄するかによって内容は大きく異なる。

搬出と保管、廃棄

Load out and back to stock storage or disposal

搬入の逆であるが、バラシ同様保管か、廃棄かによって内容は大きく異なる。

第3章 創作にかかわるスタッフ

Creative team and technical staff

演出家

Director

上演にあたって作品のコンセプトや芸術的方向性、表現方法などについて最終的な決定権を持ち、舞台における様々な要素（演技、装置、照明、音響など）の総合的責任者として上演を成功に導くべき立場にある。演出家は台本の分析を綿密に行い、自分の表現意図を交えながら解釈し具現化する。

美術デザイナー

Set designer

台本を読み解き、演出家のイメージを取り入れながら舞台上の装置をデザインする仕事。独創性が求められるが絵空事をデザインするわけではないので、舞台についての知識と理解も不可欠である。

衣裳デザイナー

Costume designer

美術デザイナー同様演出家のイメージを取り入れながら出演者が身につける衣裳、ヘアメイク、履物などのすべてをデザインする仕事である。舞台美術に合った配色、出演者の体型や、出演者相互のバランスにも配慮しなければならない繊細な仕事である。

照明デザイナー

Lighting designer

照明の役割は舞台を観客に見せるための明かりを作ることであるが、照明デザイナーは光だけでなく闇によって、また無数の色の組み合わせや角度によって

それを表現する。また台本や演出家の要求に応える仕事であり、空間演出の創造力が求められる。そのため、演出家、美術・衣裳デザイナーとの事前打ち合わせも非常に重要である。

なおフランコ・ゼッフィレリ、ピエロ・ファジョーニ、ジャン・ピエール・ポネルなど、演出、美術、衣裳、照明をすべて一人が受け持った例もある。

音響デザイナー Sound designer

19世紀までのオペラでは電気音響が用いられなかったことから、オペラでは音響デザイナーの仕事は不必要と考える人が少なからずいるが、オーケストラ音の舞台へのハネカエリは現在の劇場では不可欠であり、また効果音など録音されたものを再生する場合、基本的に生音で上演されている中でいかにバランスよく聞かせるか、という点において、拡声することを前提にしているミュージカルなどの舞台芸術に比して非常に高度なセンスと技術を求められる仕事である。

映像デザイナー Visual / Projection designer

20世紀末から21世紀にかけて、舞台芸術では急激に映像が用いられるようになった。背景幕を描くアーティストの激減、舞台装置にかかる予算の削減など、いくつか理由は考えられるが、実際に舞台を映像で満たすためには綿密な計算と長い時間が必要であり、オペラではさらに音楽的なセンスも求められる。

振付師 Choreographer

オペラの中でのバレエシーン、または歌手が踊るシーンがある場合には振付師が必要となる。

たてし 殺陣師

Fight director

舞台上で立ちまわりを演ずる場合は危険を伴うので、専門の殺陣師が動きをつける。

演出助手

Assistant director

演出家の意図を完璧に理解し、記録し、場面によっては演出家に代わって出演者の動きをつけることもある。オペラの場合は再演にあたっては演出家ではなく演出助手が演出上のすべてについて責任を持つことが多い。特に演出家が故人となったのちにも上演が続く場合には、オリジナルの演出コンセプトを守り、しかも実際の出演者に合わせたアレンジの判断もできなければならない。

舞台監督

Stage manager

欧米では「技術監督」「プロダクションマネージャー」「舞台進行」を3者で分担するのが普通であるが、日本では古くからこれらを兼任する形で舞台監督という職種が形成されてきた。今後分担する形になっていくかどうかは予算との兼ね合いもあり、簡単には結論が出せない。

舞台監督の助手を「演出部」と呼び、上演進行にあたって重要な役割を持つ。

第4章 美術にかかわることば

Terms for scenery

一杯飾り

Single dressing stage

台本上何場面もあるような舞台でも、共通の一つのセットで表現する手法。

エレベーション

Initial sketch of scenery/elevation

美術家が舞台を正面から見たデザインを書き示したもの。今日ではエレベーションでなく模型舞台を用いてプレゼンテーションするデザイナーも多い。(海外ではそれが契約上の主流となっている。模型舞台の国際的な標準縮尺は1/25)

道具帳と書き抜き

working drawing of scenery and scale drawing

美術家が具体的に、舞台装置のアイテムの大きさ、色、素材など詳細を書き表したものを「道具帳」と呼ぶ。これを、実際に製作する大道具会社が、構造なども考えた上で道具帳を解析して作図する(すべての大道具製作会社が行なっているとは限らない)ものを「書き抜き」と呼んで区別している。

見切れ

Sight line

図解の平面図、断面図に無数に描かれている客席からのサイトライン(視野角)で、「見えてはいけない部分」をさす場合と、「見えなくなってしまう部分」をさす場合の両方がある。

とおみ
遠見

Groundrow

舞台の背景に、遠景を描いたもの。背景幕と同義に用いられることもあるが、背景幕に当てる照明を隠すため、背景幕の下部になじむ絵を描いたパネルをこう呼ぶこともある。

背景幕

Painted backdrop (cloth)

もともとは舞台の場面をわかりやすくするため、具象的な背景を描いた幕。舞台奥に吊られることから「バックドロップ」とも呼び、例えば「森バック」「海バック」「湖バック」など描かれている絵で呼びわけたりする。

第5章 舞台機構と舞台備品

Stage machinery and equipment

防火シャッター

Iron curtain

劇場を、舞台と客席を防火区画として隔てるための金属製のシャッター。現在の日本では法規制されていないばかりでなく、動作に数分を要するものばかりで、おそらく実際の火災が起きてしまった場合には「逃げたほうが早い」といわざるをえない。英国などでは30秒程度でおりののが普通で、しかも上演中(休憩時間などに)観客の前で昇降させて「この劇場の防火シャッターはきちんと機能しています」ということを見せることが法律で義務付けられている。

どんちょう 緞帳

House curtain

舞台と客席を、演出的に区切る幕。演出の種類によっては使用しない場合もある。

オペラカーテン (P.43 図解7) のように、昇降、開閉、絞りとパターンを変えられるものと、「板緞」と呼ばれる、下端に重いパイプを入れてある幕で、昇降(場合によっては巻き上げ)しかできないものがある。後者は高名な画伯によるデザインであったりする。

オペラカーテンを絞りあげで使用することを「ワーグナー緞帳」「ワーグナー式」などと呼ぶ傾向があるがそれは誤りである。リヒャルト・ヴァーグナーがパイロイトで行った緞帳の開閉は、床からすのこまでである大きな2枚の幕(半分以上はそもそも観客から見えない)の中間地点を、ほぼ真横(少し斜め上)に引くという方式で、これによって開いた状態では劇場の額縁からはほとんど緞帳が見えなくなり、また高速でも低速でも開閉できるという利点をもつ。パイロイト祝祭劇場の映像は多数公開されているのでご確認いただきたい。

暗転幕

Black drop / Running drop

舞台が暗転したのち、暗転幕と呼ばれる黒い幕を下ろして（作業灯を点灯して）場面転換をし、終わったら作業灯を消したのち暗転幕を上げ、次の場面を始めるとというのが本来の使い方だが、今日では黒いことを利用して単純に緞帳代わりに用いることも多い。

いちもんじまく 一文字幕

Boarder

舞台上部を隠す幕（P.43 図解8）

袖と袖幕

Stage wing and leg

客席から見える舞台の外側を袖といい、その部分を客席から隠す幕を袖幕という（図解8）

東西幕

Black drapery hung on side batten to mask off the sides

袖幕によって舞台袖を隠そうとしても、客席や舞台の構造によっては困難な場合がある。そこで舞台の奥行き方向にレールなどを仕込んで幕を吊り、袖部分を隠すことがある。（図解8）

間口、奥行き、タツパ

Width, depth & height

舞台の横幅を間口という。奥行きはその名の通りであるが、日本では舞台の間口に対して奥行きが狭い劇場が多い。舞台の開口部の高さを「タツパ」と呼び、ヨーロッパのオペラ劇場では間口が狭い代わりに深い奥行きと高いタツパを持つ

ものが圧倒的に多い。日本の劇場間口が10間（18m）あるのが一般的であるのに対し、ヨーロッパでは12m前後から、大きな劇場でも16m程度であるため、引越し公演の際の装置アレンジには注意が必要である。

かいちょうば
開帳場

Raked stage

舞台上のスロープ（斜面）をさす。ヨーロッパの劇場はそもそも舞台床が傾斜している設計のものが多く。

か わ
書き割り

Painted flat

紙や布に絵を描き、木で作った枠に張ったもの。

滑車とロープ

Pulley and rope

舞台で吊り物や、さまざまな道具を動かすために古典的に用いられてきたアイテム。帆船の技術が多く応用されてきた。舞台の動作は21世紀の現在でもアナログによるものが圧倒的であり、現代の舞台人もこれらを使いこなすことが求められる。

かまち
框

Piece of wood on the front edge

舞台最前部に用いられる材木をさす。（P.43 図解 8） 釘打ち、テープの使用はほとんどのホール、劇場で禁止されている。

かみて / しもて
上手 / 下手

Stage left / Stage right

客席から舞台を見て右側を「上手」、左側を「下手」という。(図解8)

回り舞台

Revolving stage

盆ともいう。江戸時代の日本で開発されたとされる舞台機構。「双子盆」「コマ回し」など複数の回り舞台を持つ劇場もある。演出によって仮設の回り舞台を作ることもある。

せり ならく 迫りと奈落

Elevator stage and the stage basement/under stage

舞台床の一部を昇降させる機構を迫りという。電動式、油圧式などの動力によって駆動する。舞台床から下がるだけのものが圧倒的に多いが、上がるものもあり、平台や開き足などを用いることなく台ができるので位置と大きさが合えば有効である。人間1人が昇降する小迫りから、間口一杯の大きさを有する大迫りまでさまざまな大きさのものがある。迫りが降り切った舞台の下部を奈落と呼び、迫りを二段階の深さまで下げられる劇場では中奈落、大奈落などと呼んでいる。

建物の構造のため、迫りが搬入機構を兼ねている劇場もある。(例：日生劇場、神奈川県民ホール)

オーケストラピット

Orchestra pit

オペラ、バレエ、ミュージカルなどでオーケストラが演奏するスペース。「オーケストラボックス」と呼ぶ場合もある。(P.43 図解7) 迫りの一種として電動式、油圧式などのほか、手動のもの、また、客席の床を取り外す構造の劇場も存在する。また、全体が一体型で昇降するものと、2分割、3分割などいくつか

わかれて昇降するものもある。専用劇場でない場合は、この部分に客席が設置できるような構造となっていることが多い。(東京文化会館大ホール、新国立劇場オペラ劇場は客席にはできない)

切り穴

Trap

舞台の任意のところに穴を開けて、仮設の迫りや地下からの階段、トラップを仕込むなど、取り外すことができるようになっている床構造をさす。

スライディングステージ

Sliding stage

舞台床を上手、下手、奥のいずれかの方向にスライドさせるシステム。かつてのドイツで主流だった構造では舞台袖からワゴンを主舞台までスライドさせて、主舞台の迫りによってワゴン分を沈める方式であったが、舞台袖にワゴンがある状態が通行を妨げることなどから、主舞台面の床を沈めてその上に袖からワゴンが走行する方式が現在の主流といえる。

階段の蹴上げと踏面

Riser (vertical portion) and going (horizontal portion) of tread

(P.44 図解 9)

ビャクロク (白緑)

One step tread

一段だけで舞台上がるための段。

ケコミ Riser

台組の前部分をさす（図解9）

消し幕

Piece of fabric to mask off something or someone on stage during blackout

暗転状態の時、白っぽい衣裳や小道具を転換すると、わずかな光によって目立ってしまうことがある。それを隠す黒い布を「消し幕」という。舞台装置の色によっては、必ずしも黒布とは限らない。

地がすり

Floor cloth

舞台の床に敷く布。その他、代表的な床材について、下記の表を参照。

地ガスリ floor cloth	短時間で敷くことができる	布なので破ける可能性が高い、ピンと張るのが難しい
リノリウム linoleum	弾性があるのでバレエに適している	重い、特に1間幅のものは2人でもつらい バラシの際、きれいに巻くのには技術と経験が必要
パンチカーペット needle puch carpet	軽い	ゴミがつきやすく掃除が面倒 音を吸ってしまうのでオペラにはあまり向かない

ベニヤ板 (2分厚以上) plywood floor	重量のあるワゴンを動かしても耐えられる	バラシの際、傷をつけやすい
		3×6、4×8などの単位なので舞台一面を埋めるにはかなり時間がかかる

シズ (ウェイト)

Weight / Counter weight

舞台で使用するおもりのこと。

紗幕

Scrim

多くは「英国紗」と呼ばれる、縫い目のない布で、タテ糸ヨコ糸の太さ、本数、さらに目の細かさによって多くの種類がある。また「亀甲紗」という、目が六角形のものもある。紗幕はその奥に照明を入れるかどうかによって見せ方が大きく異なる。主に、幻想的な効果を生み出しやすい。

中には「寒冷紗」のように、必ず縫い目を伴う素材をあえて用いる美術デザインもある。

平台と箱馬

Platform and riser box

日本の舞台で用いられている、台組を作るための基本モジュール。サイズは尺貫法に基づき、3×6尺(909mm×1818mm)を基本として4×6尺(1212mm×1818mm)、6×6尺(1818mm×1818mm)など各種ある。厚み(カマチという)は通常4寸(121mm)とされているがそれ以外のものもある。箱馬は平台の下に入れて高さを変えるための簡易な木製の箱で、通常6寸×1尺

×1尺(181mm×303mm×303mm)か6寸×1尺×1尺1寸(181mm×303mm×333mm)を基本のサイズとしているがこれも各種のサイズがある。平台と箱馬の組み合わせで1尺(303mm)高、1尺4寸高(424mm高)、1尺5寸高(454mm高)などの台を容易に作ることができる。

ひらあし 開き足

Leg for platform

箱馬では作りにくい、より高い台を作るために多目的ホールが備品としているもの。これにより2尺1寸高(636mm高)、2尺8寸高(848mm高)などの台を作ることができるが、不安定なので熟練した舞台技術者が立ち会うことが望ましい。

すのこ Grid

舞台上部の、吊物機構の動作設備(滑車、モーターなど)を備え付けた部分をさす。吊り物の仮設や吊り機構のメンテナンスを考えると、すのこは二重構造で、かつ上段と下段の間には作業員が立つことのできる高さがあることが望ましい。(写真1)



写真1 スノコ
(写真は大阪市のフェスティバルホールのスノコ)

ギャラリー

Gallerly

舞台を取りかこむように設置された回廊。照明や音響、特殊効果のために有用ではあるが、ある程度の高さがないと、それ自体が舞台装置の動きに制約を与える原因となる。

美術バトン

Fly batten / Fly bar

舞台の吊り物機構のうち、舞台装置（パネル、幕、オブジェなど）を吊るためのパイプ。手動式と電動式がある。

照明バトン・ブリッジ

Lighting batten / Lighting bar and lighting bridge

照明機材を吊り込むために照明回路が内蔵されているバトン。サスバトンともいう。照明機材を上空で操作するために操作員が乗り込めるブリッジ構造になっているものを照明ブリッジと呼ぶ。

点吊り

Point hoist

バトンのように間口一杯を使用するのではなく、ポイントごとにものを吊りたい場合に用いる。1点と限らず、複数の点で吊ることもできる。設備として所有している劇場ではワイヤー巻き取り式のモーターを使用しているところがほとんどである。

中割幕（引割幕）

Traveler curtain

舞台の黒幕で開閉式のもの。舞台の奥行きに対してだいたい半分くらいのとこ

ろで、舞台前と舞台奥を区切るものを中割幕、何層かに開閉式の黒幕を有している場合を前から「第1引割幕」「第2引割幕」のように呼んでいる場合が多いが、これといった決まりはない。

張り出し舞台

Thrust stage

本来の舞台に対して、さらに観客席に向かって演技エリアを拡張したい場合に仮設する舞台をさす。

張り物

Flat

木材の枠に、紙や布、ベニヤ板などを張った大道具のこと（P.44 図解 10）

にんぎょう だ 人形立て

French brace / Jack

（図解 10）単に「人形」とも呼ぶ。

ひきわく 引枠

Wagon

（写真 2）

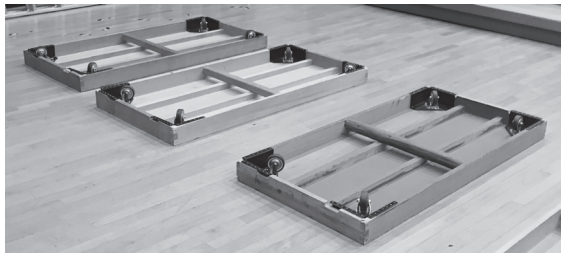


写真 2 引枠の一例（裏返してみたところ）

振りかぶせ・振り落とし

Kabuki drop

舞台にはじめは見えていない幕を、仕掛けによって突然見せることを「振りかぶせ」という。また、舞台に飾られている（吊られている）幕を、仕掛けで一瞬に床に落とすことを「振り落とし」という。これは合わせて使われることも、どちらか一つだけの手法を用いることもある。

プロセニウム（ポータル）

Proscenium (portal)

(P.43 図解 7)

ホリゾン

Horizont / Cyclorama

(P.43 図解 8)

第6章 音楽にかかわることば

Terms for music

指揮台・指揮者譜面台

Conductor's podium and conductor's music stand

写真の指揮者譜面台には譜面灯が内蔵されていないが、オペラでは内蔵型を使用するほうが多い。(写真3)



写真3 指揮台と指揮者譜面台
オーケストラピット（通称オケピット、オケピ）の指揮者の背面は、写真のように白くすることが多い。

譜面台・譜面灯

Music stand and its light

この写真は白熱球を使用している。近年LED式の譜面灯の開発が進んでいるが、緩やかにフェードイン、フェードアウトさせる必要があるため、まだ完全とはいえない。(写真4)



写真4 譜面台と譜面灯
(写真3,4は昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・シヨウワにて撮影)

プルト台

Player's podium

オーケストラの中で主に弦楽器の1プルト、2プルトなど指揮者に近い奏者の椅子の下に10cmから30cmくらいの台を置くことによって、指揮者を見上げる角度を緩くし演奏しやすくするための台。もともと「プルト」とはドイツ語で譜面台を指すので言葉としては不自然であるが、簡易的にこう呼ばれている。(写真5)



写真5 プルト台
(東京文化会館大ホールにて撮影)

プロンプター

Prompter

オペラ歌手は楽譜を暗譜し、中には相手役の歌詞や音程まで全て頭に入っている歌手もいるが、それでも時として歌詞を「落とす」現象が生じることがある。それが原因で公演が破綻しないためにプロンプターを配置するプロダクションが多い。通常は舞台前のセンターに「プロンプターボックス」という小さなスペースを設置してその中に入るが、美術的に望ましくない場合には他の場所に設置することもある。また、カーテンコールの際には目障りなため、オペラ本編が終わるやいなやボックスをたたんでしまえる構造をもっている劇場も海外には存在する。

楽譜について

About music score

オペラの上演にあたっては、新作でない場合どの出版社の楽譜を用いるか(初演版、原典版や最新の研究に基づくクリティカル版など)をまず決定する。その上で、指揮者が用いるフルスコア Full music score (総譜)、オーケストラの奏者が用いるパート譜 Partial music score、歌手やスタッフが用いるヴォーカルスコア Vocal score (ピアノ伴奏譜)を手配する。稽古が中断した場合や

テクニカルリハーサルなどで音楽の途中から開始する場合、それぞれのページ数は全く異なるので、共通言語として練習番号や小節番号を用いる。練習番号はアルファベットであることが多いが常に再開に適切な箇所にあるとは限らないので、「Bの5小節目から」とか「Mの前4小節から」のように目安として使用する。

こうした場合指揮者はよりわかりやすくするため「B」ではなく「ベートーヴェン」、「M」ではなく「モーツァルト」のようによく知られている作曲家の頭文字に読み替えるなどの工夫をしている。

楽譜は常にすべて演奏するとは限らず、一部をカットすることもある。例えば《椿姫》などでは伝統的にカットされてほとんど上演されない箇所もあるし、《タンホイザー》でもドレスデン版とパリ版を折衷した上でさらにカットを施すのが世界的な慣例になりつつある。

第7章 その他の舞台用語

Other theatrical terms

いたつき 板付

Beginner

(幕あきなどで) 出演者が初めから舞台にいること。オペラ公演でオーケストラ奏者が開演前からオーケストラピットにいることもそう呼ぶ。(コンサートでは開演直前まで奏者は舞台にいないのが普通なので、それとの対比として用いられている)

インカムとトランシーバー

Walkie talkie / Cans

インカムは舞台進行のための通信機器。有線と無線があり、双方向で会話ができる。

複数の回線があれば、照明、音響など多くのセクションと個々に、また一斉に連絡をとることができる。

それに対し、トランシーバーは一方通行の通信機器で、インカムのような機能はないが、舞台進行においてはよく用いられている。

キューランプ

Cue lamp

舞台進行の上で、ランプのオン、オフ、またはスタンバイランプ、ゴーランプを用いてキューを出すシステム。大きな大道具を同時に動かす場合など、インカムでは伝えにくいケースや、場面転換の間音楽を止めて指揮者が待っている場合、転換が終わったことを伝える時に使用する。

こけら

柿落とし

Performance for grand opening of new theatre

舞台では新築の劇場で行われる最初の公演。「柿（こけら）」は昔の木造建築の木くずを指す。

初演・再演

New production / Revival production

初演とは ①新作を委嘱して上演すること ②新演出の新しいプロダクションの二つの意味がある。

再演は、すでに初演された演目のリバイバル上演。レパトリーシステムをとっているオペラハウスではこの双方を組み合わせて年間スケジュールを組み立てることが圧倒的に再演が多い。すでに演出家が亡くなっているのに上演が続いている作品が多いのはオペラの最大の特徴と言えるが、それにはほとんどの場合、有能な演出助手が参画している。

モニター（音響）

Audio monitor

舞台上、もしくは舞台袖、照明操作室（調光室と呼ぶ）、ピンルーム（フォロースポット室）などで直接音が聞き取りにくいキャスト、スタッフのために、必要な音を聞こえるように音響システムを設置することをモニターと呼ぶ。

モニター（映像）

TV monitor

音響モニター同様、舞台正面の映像や指揮者の映像を、それを必要とするキャスト、スタッフが見ることが出来る映像システムもモニターと呼ぶ。現在モニターがデジタル化したため、実際の映像と画面の映像に時差（遅延）が発生する症状が問題になっている。

スカラ台車

Small wagon

1980年にミラノ・スカラ座の日本公演が行われた際、スカラ座のスタッフが持ってきた、30cm角程度の大きさの厚板にキャスターを取りつけた台車（当時の日本の舞台では全く使用されていなかった）で重量物をたやすく運んでいるのを見た日本人スタッフが同じようなものを作り、「スカラ台車」と呼ぶようになった。

すじかい 筋交

Brace

台組や壁パネルを組み上げる際、斜め方向に入れる補強のこと。イントレなど工事用足場（舞台で用いることも多い）の斜め補強もそう呼ぶ。

スチールデッキ

Steel framed platform with wooden top / Steeldeck

元はイギリスのSteeldeck社が商標登録している舞台の台組のためのモジュール（基本サイズは4フィート×8フィート）だったが、現在の日本ではそれをアレンジした、鉄骨に厚ベニヤを組み合わせたものをそう呼んでいる。大きさは日本の舞台の慣習に従い、3尺×6尺、4尺×6尺、6尺×6尺など、平台のサイズに準拠したものが多く用いられている。平台と異なり、四隅に入れるパイプの長さによって容易に高さのある台を作ることができる。

特殊効果

Special effect

劇場のような大衆が集まる施設においては消防法で禁止されている行為（喫煙・裸火使用・危険物品持ち込み）を行うためにはあらかじめ消防署に禁止行為解除承認申請書を出し、認可を得なければならない。提出書類の作成（平面図に消火対策を記入したものや、行為者、禁止行為の種類などを細かく書く）だけ

なく、消防署の査察（実際にどのように使われるかを消防署の係官が見にくること）に立ち会い、消火体制や通報などについて説明する。

届け出を必要としない特殊効果（雪、雨、風、雷など）の手法もある。本水（舞台上で実際に水を使用する）は届け出は不要だが、舞台機構、照明、音響機材に被害が及ばないように、使用する際には細心かつ入念な養生が不可欠である。

抜き蝶番（丁番）

Pin hinge

日常家庭など用いられている蝶番と異なり、ピンの部分が抜き取れるようになっているもの。組み立て、バラシを繰り返す舞台装置では、ピンの抜き差しだけで構造物ができるため重宝である。

ホワイエ

Foyer

フランス語で「暖炉」を意味する。ヴェルサイユ宮殿の劇場やパリの旧オペラ座（ガルニエ）のロビーには実際に暖炉があり、それを語源とする説もある。

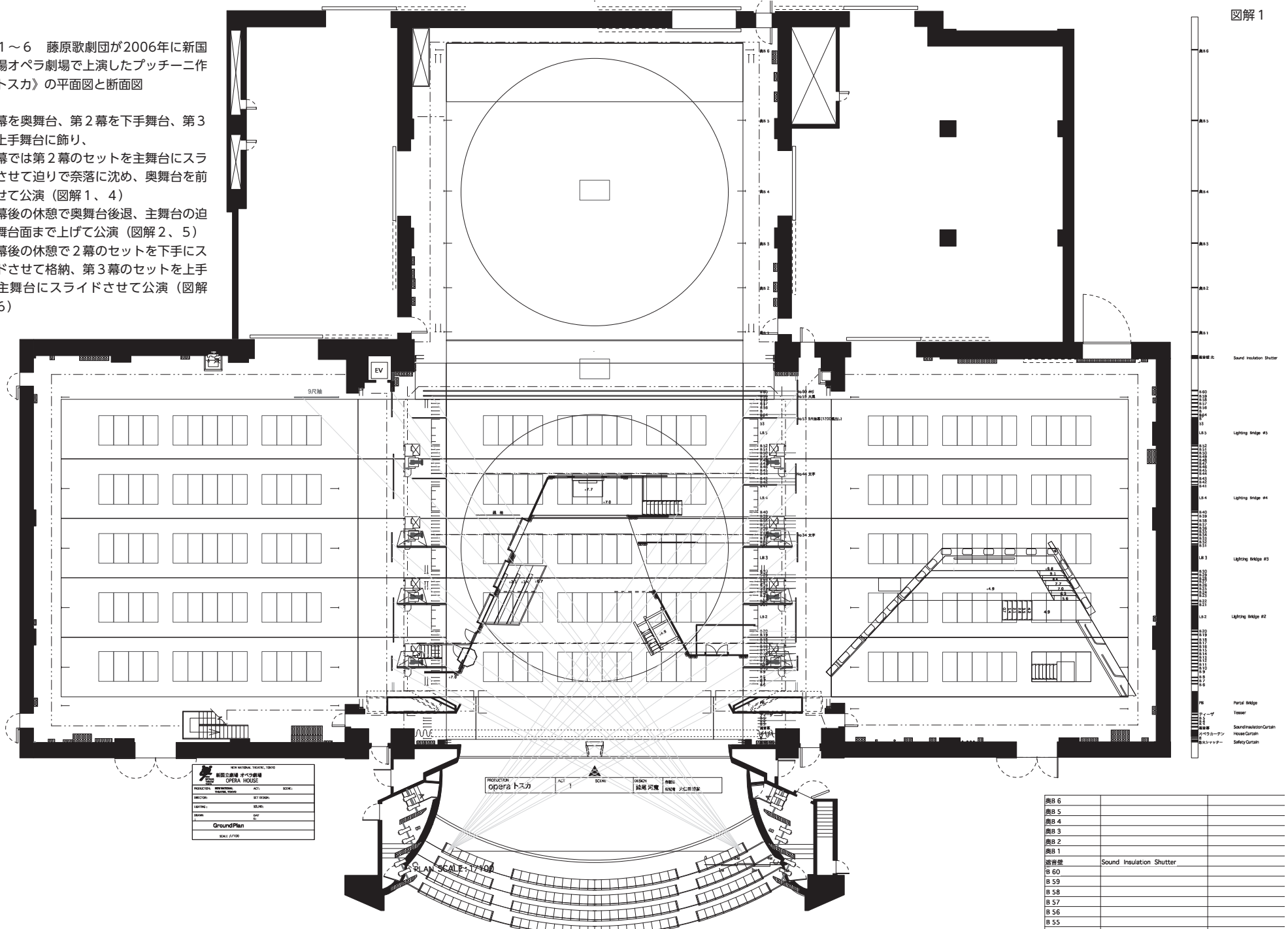
まくあい 幕間

Interval

幕と幕の間。「まくま」と読むのは誤りである。

図解 1～6 藤原歌劇団が2006年に新国立劇場オペラ劇場で上演したプッチーニ作曲《トスカ》の平面図と断面図

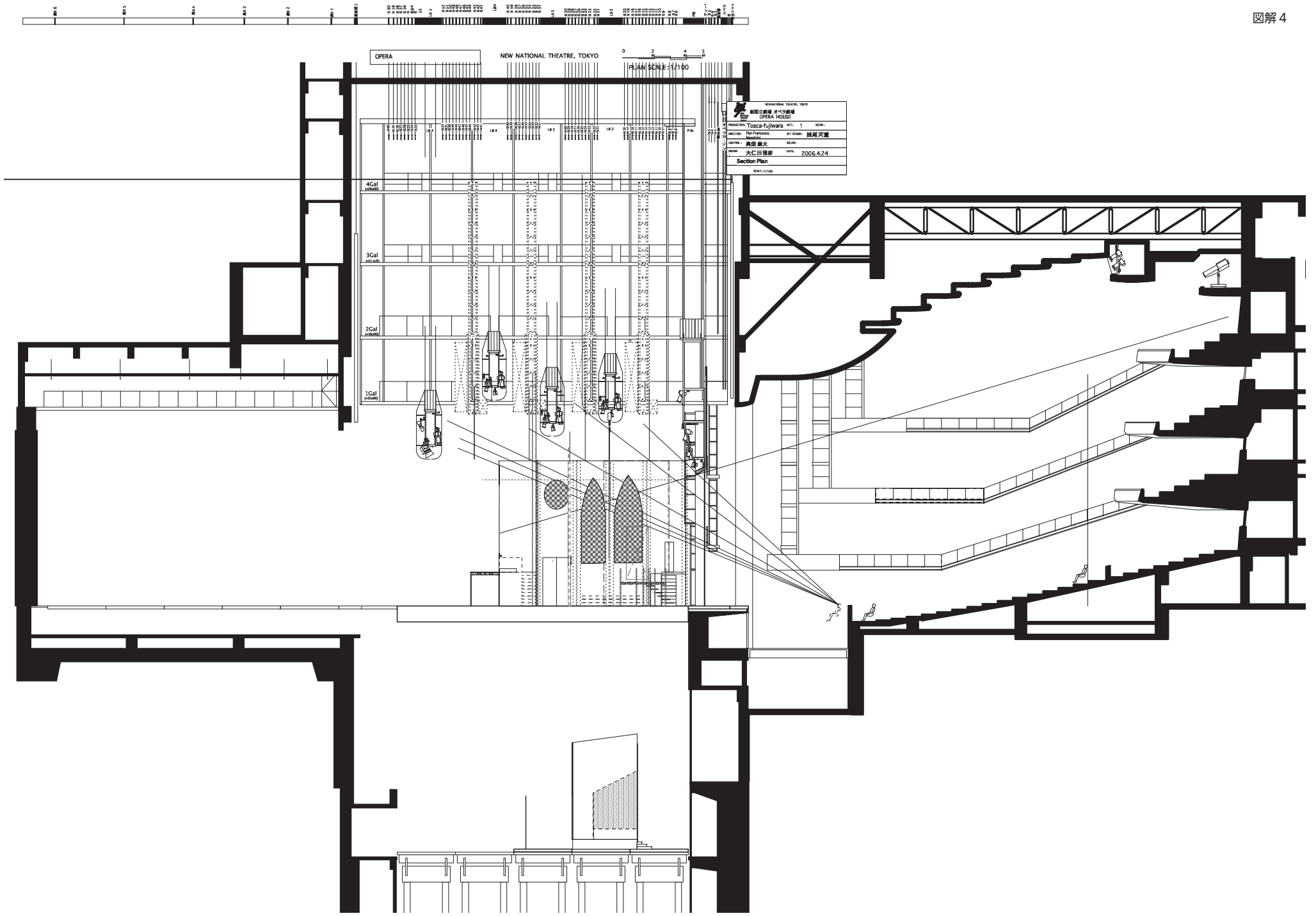
第1幕を奥舞台、第2幕を下手舞台、第3幕を上手舞台に飾り、
 第1幕では第2幕のセットを主舞台にスライドさせて迫りで奈落に沈め、奥舞台を前進させて公演（図解1、4）
 第1幕後の休憩で奥舞台後退、主舞台の迫りを舞台面まで上げて公演（図解2、5）
 第2幕後の休憩で2幕のセットを下手にスライドさせて格納、第3幕のセットを上手から主舞台にスライドさせて公演（図解3、6）

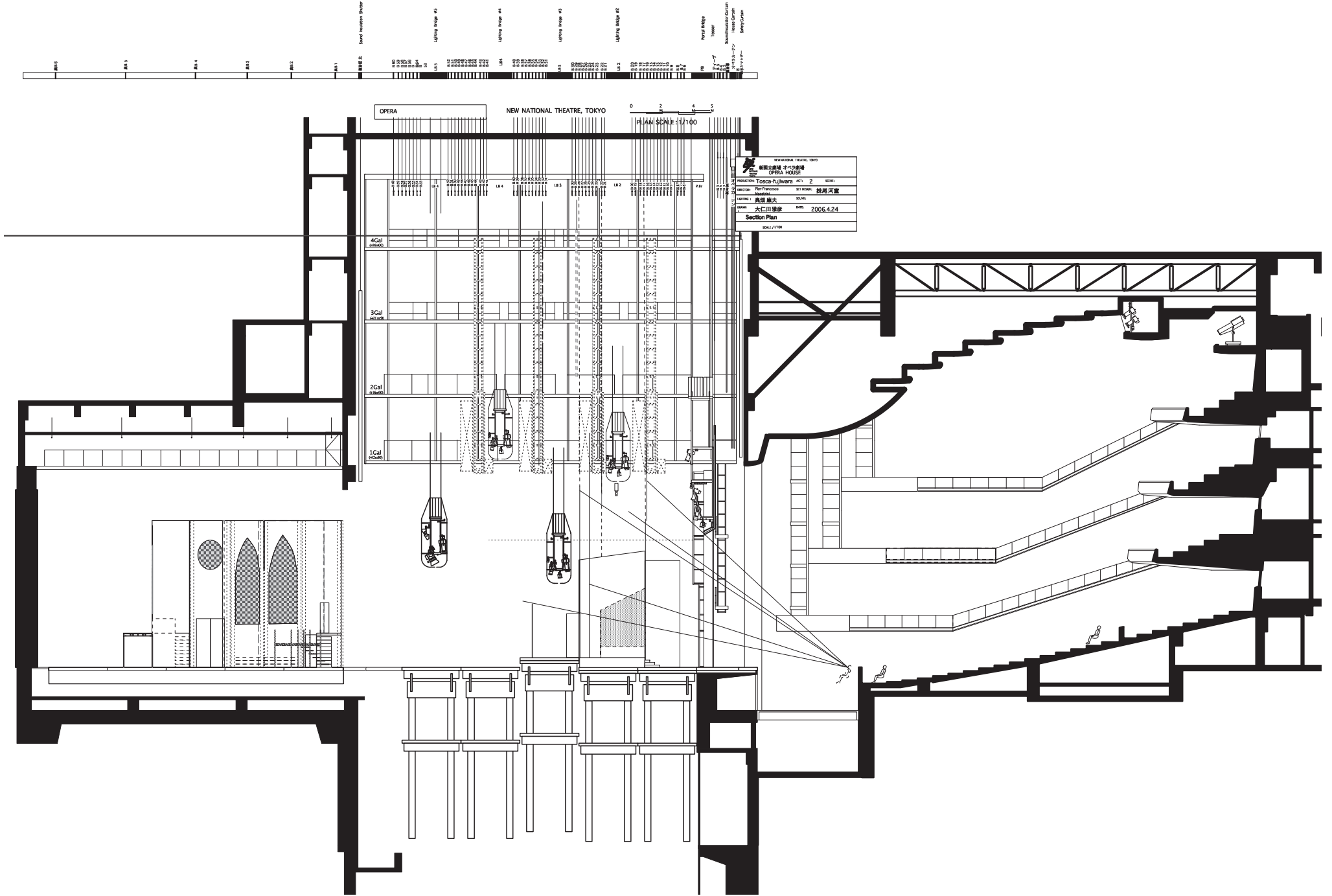


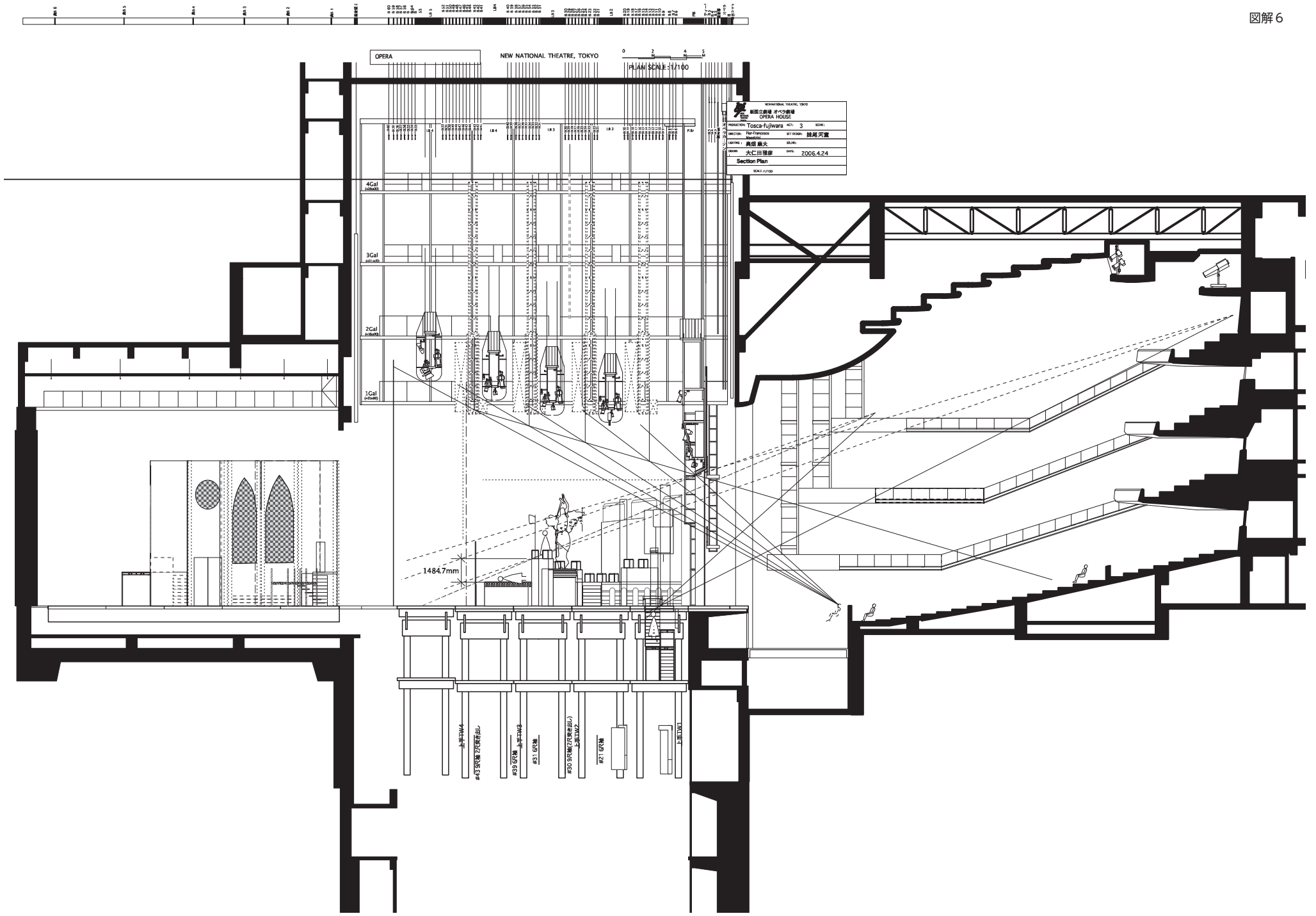
新国立劇場オペラ劇場
 OPERA HOUSE
 PRODUCTION: 藤原歌劇団
 ACT: 1
 SCENE: 1
 DIRECTOR: 新井 隆
 DESIGNER: 石川 浩
 SCALE: 1/100
 Ground Plan

PRODUCTION: opera トスカ
 ACT: 1
 SCENE: 1
 DIRECTOR: 新井 隆
 DESIGNER: 石川 浩

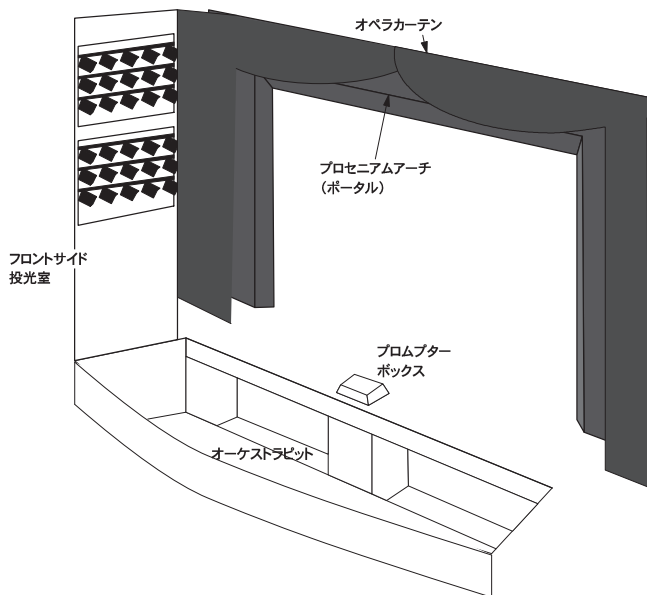
奥B 6		
奥B 5		
奥B 4		
奥B 3		
奥B 2		
奥B 1		
通音壁	Sound Insulation Shutter	
60		
B 59		
B 58		
B 57		
B 56		
B 55		



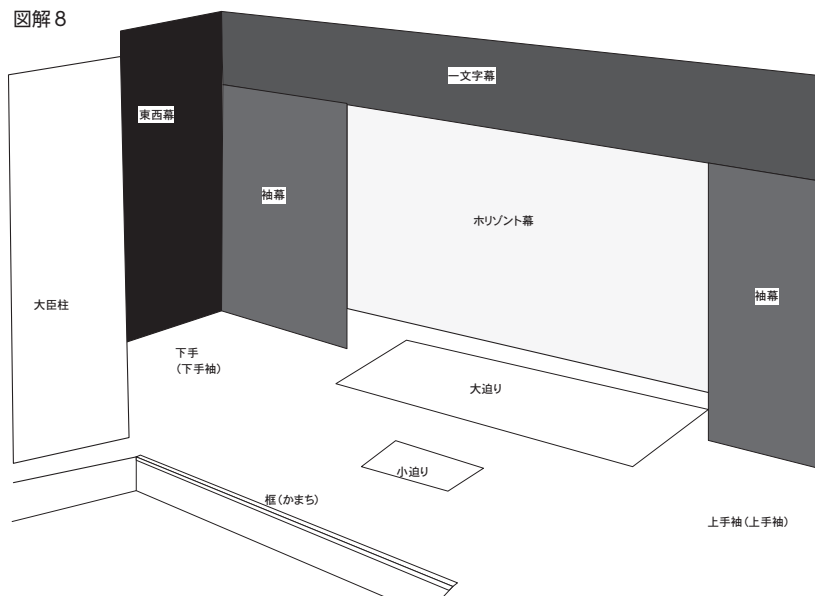




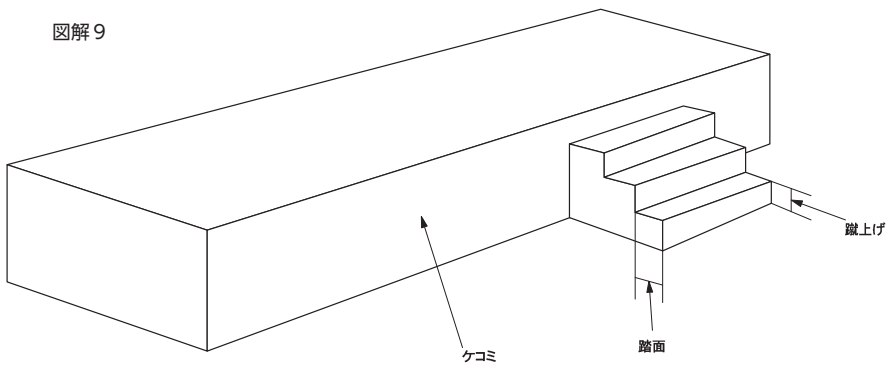
図解 7



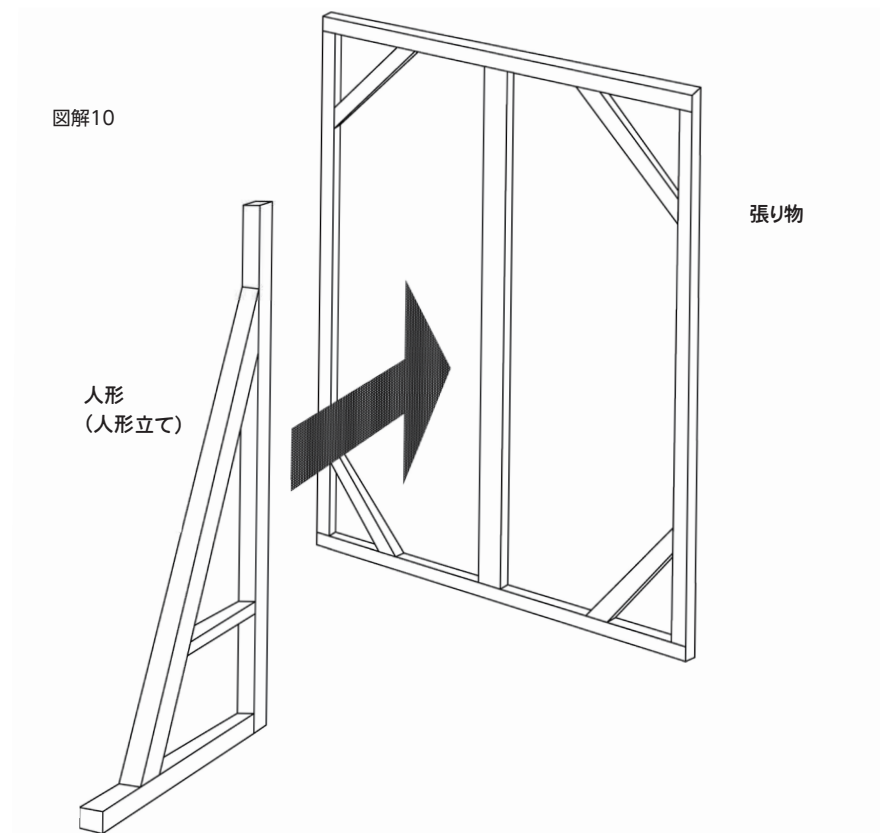
図解 8



図解9



図解10



索引

あ

明かり合わせ	7
暗転幕	19
衣裳	5
衣裳合わせ	5
衣裳デザイナー	13
板付 (いたつき)	32
一文字幕	19
一杯飾り	16
インカム	32
ヴォーカalsコア	30
映像デザイナー	14
エレベーション	16
演出家	13
演出助手	15
オーケストラピット	21
奥行き	19
音楽稽古	3
音響チェック	8
音響デザイナー	14

か

開演前チェックとプリセット	10
開演前のセレモニー	11
開場	10
階段の蹴上げ	22
階段の踏面 (ふみづら)	22
開帳場	20
書き抜き	16
書き割り	20
楽譜	30
滑車とロープ	20
框 (かまち)	20
上手 (かみて)	21
ギャラリー	26
休憩	11
切り穴	22

稽古道具	5
稽古場の鏡	4
稽古場の準備	4
稽古場の使い方	4
ケコミ	23
消し幕	23
ゲネプロ	10
香盤 (こうばん)	2
柿落とし (こけらおとし)	33

き

再演	33
サウンドチェック	9
地がすり	23
指揮者譜面台	29
指揮台	29
仕込み	6
シズ (ウェイト)	24
下手 (しもて)	21
紗幕 (しゃまく)	24
終演後の作業	12
照明デザイナー	13
照明バトン	26
初演	33
スカラ台車	34
筋交 (すじかい)	34
スチールデッキ	34
すのこ	25
スライディングステージ	22
制作打ち合わせ	2
迫り (せり)	21
袖 (そで)	19
袖幕 (そでまく)	19

た

立ち稽古	3
タツパ決め	6
タツパ	19
殺陣 (たて)	15
附帳 (つけちょう)	3

テクニカルリハーサル…………… 8
 点吊り……………26
 道具帳……………16
 東西幕……………19
 遠見（とおみ）……………17
 特殊効果……………34
 緞帳（どんちょう）……………18

な

中割幕（引割幕）……………26
 奈落……………21
 人形立て（人形）……………27
 抜き蝶番（丁番）……………35

は

場当たり…………… 9
 パート譜……………30
 背景幕……………17
 箱馬……………24
 バラシ……………12
 張り出し舞台……………27
 張り物……………27
 搬出と保管、廃棄……………12
 バンチカーペット……………23
 搬入…………… 6
 引枠（ひきわく）……………27
 美術デザイナー……………13
 美術バトン……………26
 ジャクロク（百緑）……………22
 開き足……………25
 平台……………24
 フォーカス（サス合わせ）とバミリ…………… 7
 舞台監督……………15
 舞台機構……………18
 舞台稽古（オーケストラによる）…………… 9
 舞台稽古（ピアノ伴奏）…………… 9
 舞台備品……………18
 舞台平面図・断面図…………… 2
 譜面台……………29
 譜面灯……………29

振りかぶせ・振り落とし……………28
 振付師……………14
 フルスコア（総譜）……………30
 プルト台……………30
 プレゼンテーション…………… 2
 プロセニアム（ポータル）……………28
 プロンプター……………30
 ベニヤ板……………24
 防火シャッター……………18
 ホリゾント……………28
 ホワイエ……………35

ま

幕間（まくあい）……………35
 間口……………19
 回り舞台……………21
 見切れ……………16
 モニター（音響）……………33
 モニター（映像）……………33

ら

リノリウム……………23

INDEX

A

- Assistant director15
 Audio monitor33

B

- Beginner32
 Black drapery hung on side batten to
 mask off the sides19
 Black drop19
 Boarder19
 Brace34

C

- Choreographer14
 Conductor's music stand29
 Conductor's podium29
 Costume 5
 Costume designer13
 Costume fitting 5
 Cyclorama28

D

- Deadening session 6
 Depth19
 Director13

E

- Elevation16
 Elevator stage21

F

- Fight director15
 Final dress rehearsal10
 Fit up 6
 Fixed mirror in rehearsal room 4
 Flat27
 Floor cloth23
 Fly batten / Fly bar26
 Focus and marking 7
 Foyer35
 French brace / Jack27
 Full music score30

G

- Gallerly26
 Going (horizontal portion) of tread22
 Grid25
 Ground plan and side elevation of set 2
 Groundrow17

H

- Height19
 Horizontal28
 House curtain18

I

- Initial sketch of scenery16
 Intermission11
 Interval35
 Iron curtain18

K

- Kabuki drop28

L

- Leg19
 Leg for platform25
 Lighting batten /
 Lighting bar and lighting bridge26
 Lighting designer13
 Lighting session 7
 Linoleum23
 List of props, handprops, shoes 3
 Load in 6
 Load out and back to stock storage
 or disposal12

M

- Music score30
 Music stand29
 Music stand light29
 Musical rehearsal 3

N

- Needle puch carpet23
 New production33

O	
One step tread	22
Opening house	10
Orchestra pit	21
Overview of production presentation	2
P	
Painted backdrop (cloth)	17
Painted flat	20
Partial music score	30
Performance for grand opening of new theatre	33
Piece of fabric to mask off something or someone on stage during blackout	23
Piece of wood on the front edge	20
Pin hinge	35
Planning layout of rehearsal room	4
Platform	24
Player's podium	30
Plywood floor	24
Point hoist	26
Preparation in rehearsal room	4
Pre-show check and preset	10
Production meeting	2
Prompter	30
Proscenium (portal)	28
Pulley and rope	20
R	
Raked stage	20
Rehearsal	3
Rehearsal set	5
Revival production	33
Revolving stage	21
Riser	23
Riser box	24
Riser (vertical portion) of tread	22
Running drop	19
S	
Scale drawing	16
Scene division marked by entrance and exit of casts	2
Scrim	24
Sequences before performance	11
Set designer	13
Sight line	16
Single dressing stage	16
Sliding stage	22
Small wagon	34
Sound balance check with orchestra and singer	9
Sound check	8
Sound designer	14
Special effect	34
Stage basement	21
Stage equipment	18
Stage left	21
Stage machinery	18
Stage manager	15
Stage rehearsal with orchestra	9
Stage rehearsal with piano	9
Stage right	21
Stage wing and leg	19
Steel framed platform with wooden top / Steeldeck	34
Strike	12
T	
Technical rehearsal	8
Thrust stage	27
Trap	22
Traveler curtain	26
TV monitor	33
U	
Understage	21
V	
Visual / Projection designer	14
Vocal score	30
W	
Wagon	27
Walk through	9
Walkie talkie / Cans	32
Weight / Counter weight	24
Width	19
Work after performance	12
Working drawing of scenery	16

あ　と　が　き

「オペラの舞台用語集」という題名で数々のことばについての解説をまとめましたが、いささか急いで作成したため、欠落してしまった項目もあるのではないかと懸念しております。時期をみて、補完していきたいと思いますのでご容赦ください。

本文の一部、さまざまなスタッフの役割についての記述は、私の昭和音楽大学での教え子で、現在舞台上で活躍している松尾優美さんの卒業論文から引用したところがあります。それと、引枠の写真は、同じく教え子で今年昭和音楽大学を卒業する飯塚彩子さんの撮影したものを使用しました。二人には、この場を借りてお礼申し上げます。

また、本書は「日英」と銘打ってあるように語句に英訳をつけてあります。これは、私が舞台監督として所属している株式会社ザ・スタッフのメンバーで英語が堪能な須藤 清香さんにお願ひしました。彼女は学生時代アメリカで舞台の勉強をしたのち帰国し、現在は新国立劇場で舞台監督、演出部として第一線で活躍しています。

その他、写真の撮影、図面の掲載などについて快くご了承くださった関係者の皆様にも、あわせてお礼申し上げます次第です。

もし、本書の内容に疑問やご指摘がございましたら、遠慮なくご連絡いただければ幸いです。可能な範囲で対応させていただきたいと考えております。

平成 31 年 2 月

オペラ舞台用語集 使用場面別 英語表現付

2019年3月 初版発行

著者 大仁田 雅彦
発行者 学校法人東成学園 昭和音楽大学
助成 平成30年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
「実演舞台芸術の国際共同制作を通じた
アートマネジメント人材育成」

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

印刷所 秋田協同印刷株式会社

昭和音楽大学 演奏センター
〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1
PHONE 044-953-9865
URL <https://www.tosei-showa-music.ac.jp/>

Terms of Opera Theatre

Masahiko Onita

© 2019 Showa University of Music

Printed in Japan



